

ウナベツチャシ

村田良介・松田 功・荻野幸男

〒099-41 北海道斜里郡斜里町本町49 斜里町立知床博物館

はじめに

このチャシは、1991年夏に道指定史跡である朱円竪穴住居跡群（通称朱円千穴）の踏査中に発見したものである。名称は津軽一統志に記載される「うな津村」、松浦武一郎の再航蝦夷日誌、廻浦日記、知床日誌に記載される「ウナベツコタン」との関連、さらに海別川がかつてはチャシ付近でオホーツク海に注いでいたことなどから命名した。「ウナベツ」[灰の・川]の意味で、昔、火山の噴火で灰が川を埋めつくしたからだという。

斜里町内では、本チャシを含めてこれまで8つのチャシが確認されている（図1）。これらの立地は、平野部の砂丘上に位置するウツナイ、ガツタンコ1・2、ウナベツの各チャシと、半島部の段丘上に位置する弁財、ウトロ、ペレケ、文吉湾の各チャシに大別できる。

立地

知床半島の付け根にあたる斜里平野は、縄文時代前期の海進以降、現在の汀線付近に海岸砂丘を形成した（荒田他1979）。また、砂丘の形成により内湾化した現在の平野部は上流からの堆積物と、海進後の海水面の低下によりしだいに陸化していった。この海岸砂丘上には、縄文時代中期以降の遺跡が多数分布している。各河川は平野部を流れた後、この海岸砂丘付近を蛇行しながら流れ、砂丘列の間隙をぬって海に注いでいる。

海別岳から流れる海別川もそのひとつで、現在は砂丘列の内陸側で奥薬別川と合流しオホーツク海に注いでいる。チャシはオホーツク海に面しているものの、かつてはチャシのすぐ北側を海別川が流れており、現在も旧河床が古川となって残っている。したがって、チャシ構築時には奥薬別川も朱円竪穴住居跡群のある砂丘西側で海別川と合流し、チャシ付近で海に注いでいたと思われる。言い換えれば、ウナベツチャシ



図1 斜里町内のチャシ

は旧海別（奥薬別）川河口の海岸砂丘上に作られたチャシであるといえる（図2・3）。現在の奥薬別川の河口部分は1947～48年に放水路として開削されたものである。

海別川と奥薬別川の合流点付近にはオクシベツ川遺跡（斜里町教育委員会1980）があり、その東側の海岸砂丘上は朱円竪穴住居跡群として現在約350基の竪穴住居址が地表面から確認できる。ウナベツチャシはこの竪穴の集中する場所から、東に約800m程離れた標高10mの海岸砂丘上にある。北海道文化財に指定されている「朱円竪穴住居跡群」の指定範囲の境界から、東に約60m外側に位置する。また、旧ウナベツコタンはチャシから東に約1kmの位置にあった。

チャシ付近の砂丘は標高約10m。この付近の海岸砂丘全体の南北の幅は約600mで、チャシから南の内陸側にかけて複雑で起伏に富んだ地形を形成している。

形態

チャシ付近は、比較的幅の狭い砂丘列が東西

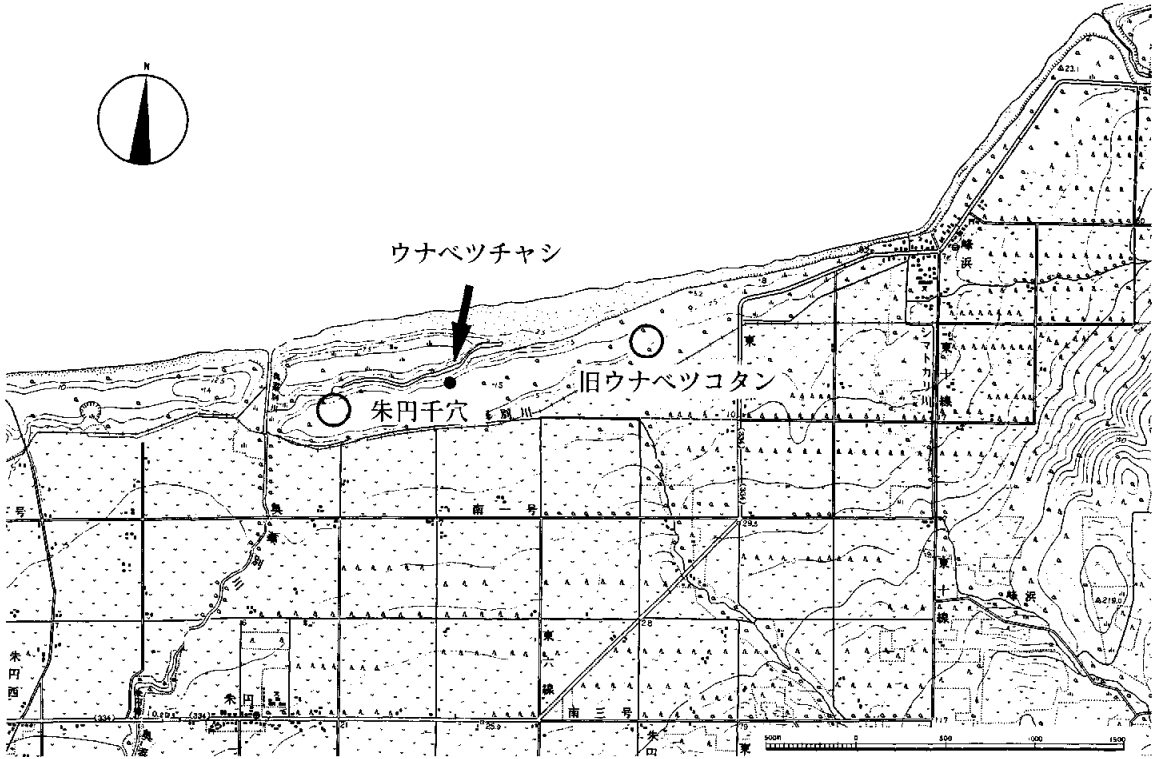


図2 ウナベツチャシ位置図

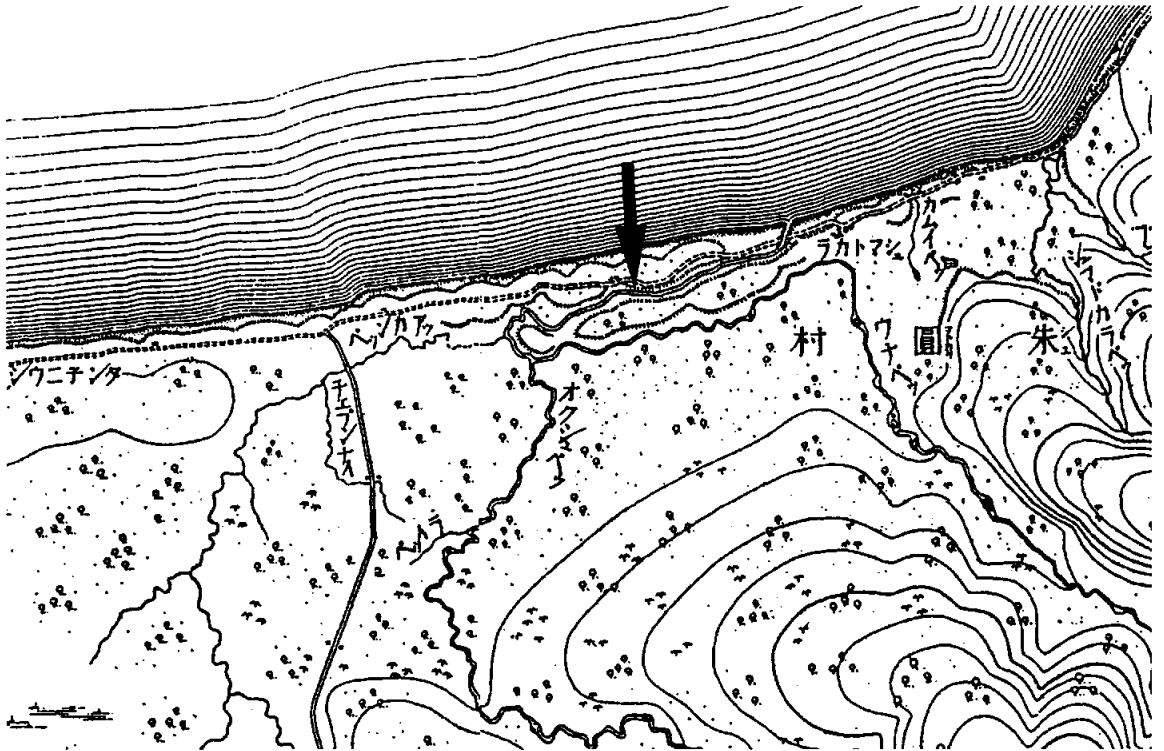


図3 1897(明治30)年頃の河川流路 (陸地測量部1897)

にのび、尾根状の地形を作る。この尾根を切るようにして、南北に2本の溝が掘られている(図4)。東側の溝は内陸側に西に湾曲しているが、斜面のため途中で消えているように見える。したがって、地表面からの観察では2本の溝はつながっていない。溝の深さはいずれも現地表面から一番深い部分で約1m、幅は最大部で約3mを測る。

溝で囲まれた平坦な部分は、東西約25m、南北約15mの長方形を呈する。ちょうど溝が無くなる部分から南に、緩やかな尾根状の地形がつながっているが、これがチャシの形態と関連するか否かは不明である。北側は、オホーツク海に面しており海面を遠望することはできるが、海岸線まで約300mある。その間に旧海別川の河床が残り現在も古川となっている。チャシのすぐ北側の斜面下には廃道状態の小径が残されているが、チャシと関連するものかどうかは不明である。チャシ周辺には竪穴住居址を想定させるような窪みは確認されていない。現在周辺はカシワやヤチダモの林になっており、地表面にはササが密生している。

ウナベツコタン

このチャシそのものに関連する記述は、松浦武四郎などの記録には記されていない。ただ、津軽一統志によれば1669年のシャクシャインの蜂起に「うな津村」から50人が参加したとの記録が見られる。時代は下るが、19世紀中頃のウナベツコタンに関しては再航蝦夷日誌で「夷人家二軒」、廻浦日記で3軒、知床日誌で5軒等の記載がある。さらに知床日誌では、クナシリへの壮年層の強制移住等による集落の疲弊の様子を詳細に記録し、アイヌ民族の行く末を案じている。また、1858年当時のウナベツ川の川幅を7~8間と記録している。

一般的に言われているように、チャシの消滅期を寛政元年のクナシリ・メナシアインの蜂起頃とすると、武四郎がウナベツコタンを訪れたのはそれから60年程後のことである。武四郎の記述によれば、この時期にはウナベツコタン自体が存亡の危機に瀕していたといえる。

まとめ

ウナベツチャシは旧海別川の河口部、標高約

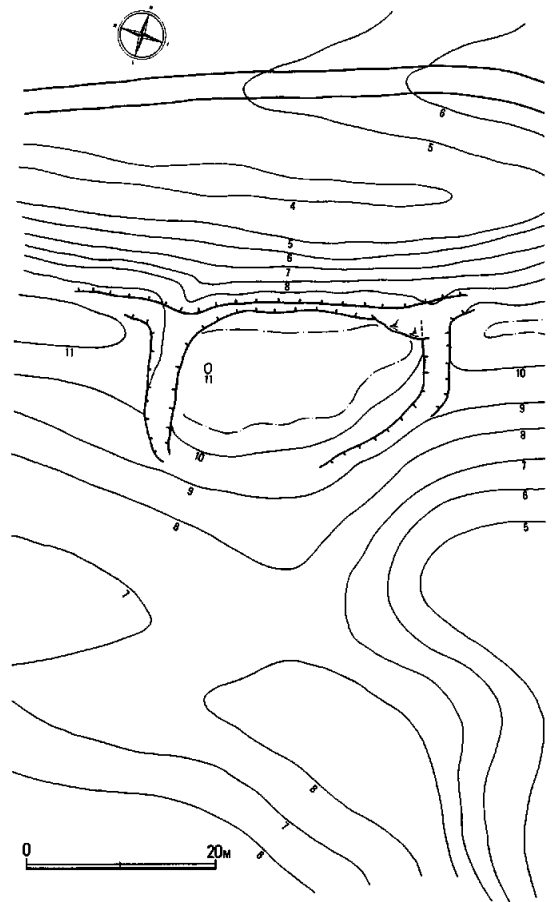


図4 ウナベツチャシ実測図

10mの海岸砂丘上に構築されている。弧状の溝を持ち、溝で囲まれた部分は長方形を呈する。最も近いコタンで関連があると思われるウナベツコタンまでは約1kmの距離がある。松浦武四郎がこの地を訪れた19世紀半ばには、このウナベツコタンは崩壊寸前の状態にあり、すでにチャシは機能していなかった可能性が高い。

参考文献

- 陸地測量部 (1897):五万分の一図「朱圓」
- 青森県叢書刊行會 (1953):津軽一統志。
- 河野広道 (1955):斜里町史。斜里町役場
- 斜里町役場 (1970):斜里町史 第二巻
- 新田治他 (1979):斜里平野の地形。知床博物館研究報告1
- 斜里町教育委員会 (1980):オクシベツ川遺跡発掘調査報告書。

宇田川洋他 (1985):北海道のチャシ集成図。北海道チャシ学会

金喜多一・金盛典夫 (1986):地名探訪しやり。斜里町立知床博物館

金盛典夫他 (1987):ウツナイチャシについて。知床博物館研究報告 8

秋葉 實 (1994):松浦武四郎知床紀行集。知床博物館協力会

Summary

Unabetsu Chashi

R.Murata, I.Matsuda and Y.Ogino.

〒009-41 Shiretoko Musenm Honcho 49 Shari-cho, Hokkaido.

The existence of 8 Ainu Chashi ruins has been confirmed in the town of shari. The Unabetsu Chasi stands at an elevation of 10m above sea level, atop a sand dune which was at the mouth of the former Unabetsu River. The ark-shaped trenches have a flat, rectangular surface. The Unabetsu-Kotan, assumed to have been the nearest kotan, lay about 1km away. It is likely that when Takeshiro Matsuura visited the area in the mid 19th century, this Unabetsu-kotan was near the point of collapsing and the Chashi was not in use.



写真1 朱円千穴とウナベツチャシ(東側上空より)